



Title	グローバルヘルスの源流
Author(s)	野崎, 慎仁郎
Citation	目で見るWHO. 2025, 92, p. 20-21
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102312
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

グローバルヘルスの源流



WHO西太平洋地域事務局 事務局長室管理官(法務・危機管理担当)

野崎 慎仁郎 (のざき しんじろう)

日本赤十字社、外務省、社団法人国際厚生事業団を経て、長崎大学国際連携研究戦略本部副本部長、教授に就任。その後、2011年7月からWHOに出向、神戸センター、WPROへ異動。

グローバルヘルスという言葉が聞かれるようになって久しく感じます。1986年に国立国際医療センターに国際医療協力部が設置された時の国立国際医療センターの英語名称はInternational Medical Center of Japan (IMCJ) でした。当時は国際保健医療協力はInternational Medicine等と呼ばれていました。National Center for Global Health and Medicineに改称されたの最近のことです。Global Healthの歴史も最近のものとと言えるでしょう。

さて、いくつか、グローバルヘルスの歴史を紐解いてみましょう。

まず、忘れてはならないのは、「橋本イニシアティブ」です。1997年にアメリカのデンバーで開催されたサミットは歴史に名を残すサミットとして有名です。何故なら、冷戦後、ロシアがG8の仲間となってサミットに参加した最初のサミットだったからです。当時の大統領はもちろん、ブーチン氏ではありません。旧

ソ連が崩壊して、新生ロシア共和国になったの初代大統領ボリス・エリツィンでした。ボリス・エリツィン氏が戦車の上に立ち、ホワイトハウスを目指す光景をモスクワで見た時には感動したものです。時代が変わった瞬間でした。このデンバーサミットから2014年のクリミア併合までロシアはG8サミットに参加し続けました。しかし、グローバルヘルスに携わる者にとって、もっと重要なのは、日本の橋本龍太郎首相がサミット史上、初めて、国際保健課題をサミットの俎上に乗せたことでした。慶応大学の剣道場で剣道の稽古をする橋本首相の元に足繫く通い、何度も寄生虫対策の重要性を説いたのは慶応大学の故竹内勉教授でした。竹内先生の凄いところは、寄生虫をG7の議題に上げて見せるとおっしゃり、橋本首相を説き伏せ、それを不規則発言とは言え、サミットの中で日本の首相から提案させてしまったところでした。当時、サミットでは安全保障や経済の問題しか

話されませんでしたから、米国のクリントン大統領や英国のブレア首相、フランスのシラク大統領など、皆が「龍太郎は何の話をしているんだ」と首を傾げたものの、次の1998年のバーミンガムサミットでは具体的な提案をすることとなり、我が国政府を上げて、「21世紀に向けての国際寄生虫対策戦略」なる冊子が出来て、これが提案されました。何を隠そう、これが後にGlobal Health Initiativeと呼ばれる最初のInitiativeだったのです。そして、このイニシアティブこそが「橋本イニシアティブ」として世界に記憶されたのです。まさにグローバルヘルスはグローバルリーダーたちとここからスタートしたのです。

この橋本イニシアティブがなければ、2000年の九州沖縄サミットでの沖縄感染症対策イニシアティブもなかったでしょうし、MDGsもGlobal Fundもなかったでしょう。何故なら、橋本イニシアティブこそが公衆衛生をGlobal Agendaに押し上げたからです。Global Agendaになったからこそ、世界中のPolitical Leaderが公衆衛生の重要性に気付けたのです。エリツィンがソ連を倒したのも歴史の転換点だったと思いますが、Global Health誕生という歴史的瞬間でした。

さて、ここから遡ること、4年余り、WHOにとっても、重要なことが起こりました。1991年に旧ソ連が崩壊したことは、公衆衛生にも大きな影響を与えました。特にワクチン供給が止まったことは一大事でした。何故なら、旧ソ連のシステムでは医薬品の製造も衛星国との間



写真1 世界初のGlobal Health Initiative (出典：WHO ホームページ)

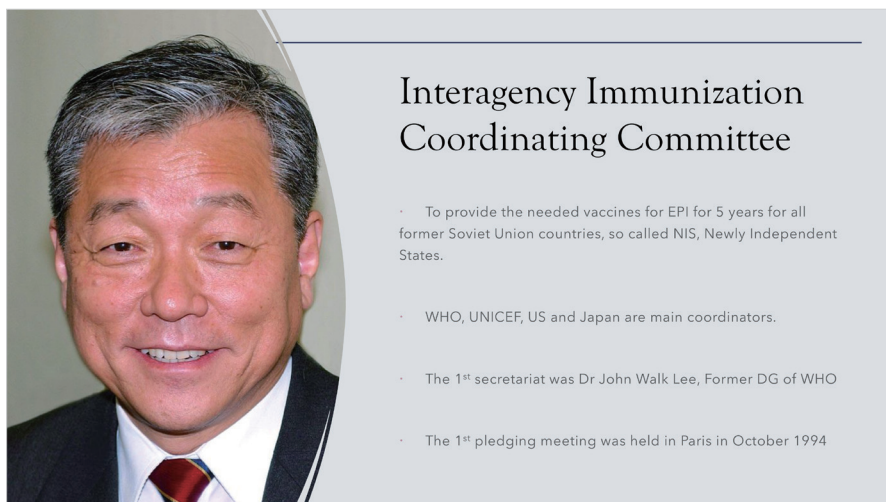


写真2 世界初のドナー協調を作ったDr John Walk Lee (写真: WHOホームページ、説明は筆者)



写真3 世界を変えた沖縄感染症対策イニシアティブ (出典: JICAホームページ)

で分業されていて、ワクチンを含む医薬品製造は東欧諸国が専ら担当していたのです。日本国政府が旧ソ連 15 か国に対する医薬品供給の支援をしたのは、このためです。ソ連が崩壊して、医薬品購入資金が支払われなくなったのが旧ソ連諸国への医薬品供給ストップの最大の原因でした。当時、欧米は西側諸国で製造された医薬品の供給を試みましたが、旧ソ連諸国から拒絶されました。薬局方のせいです。旧ソ連諸国への医療支援は先進国から転げ落ちた世界第二の超大国への

人道支援という難しい側面を持っています。日本国政府はこの状況を見極め、東欧諸国の医薬品を調達して供給しました。医薬品を作ってもソ連に売れない東欧諸国も喜んでくれました。そのようにして、日本国政府は旧ソ連諸国での医薬品流通の存続に大きな力を注ぎました。

しかし、ウイルスは我々をあざ笑うかのように、この機会を逃しませんでした。ジフテリアの流行です。1994 年の世界中のジフテリア症例の実に 8 割以上が旧ソ連諸国で起こりました。まさに医薬

品供給のストップを好機と見たウイルスによるパンデミックでした。ジフテリアだけではなく。子供たちへのワクチン接種もストップしました。EPI（予防接種拡大計画）を継続するために、後に WHO 事務局長となる Lee Jong-wook 先生と日本国政府はこのワクチン供給を継続するために、1994 年 8 月に旧ソ連 12 か国の全ての保健大臣が列席する旧ソ連支援ワクチン支援京都会議が開催されました。Lee Jong-wook 先生と日本国外務省ロシア課旧ソ連支援室が世界をリードし、Inter-agency Immunization Coordination Committee という世界初のドナー協調メカニズムが誕生しました。第一回支援国会合で、私は日本国政府代表として、ドナー会合に参加し、50 億円のコミットをしました。感動したのは私の次にトルコが「我々は日本のような多額は出せないが、少しでも協力したいと 50 万ドルのコミットを胸を張ってしたことです。感動しました。今の WHO の Investment Round の体たらくと比べると、時代が動いたのを肌で感じたものです。故 Lee Jong-wook 先生と外務省ロシア課の課長補佐だった故加賀美正人氏のご慧眼に心からの敬意を表するものであります。

ドナー協調の誕生、Global Health Initiative の誕生、今の Global Health の基礎は 1990 年代に日本の先人たちの尽力によって作られたのです。その後も 2008 年の洞爺湖サミットにおけるユニバーサル・ヘルス・カバレッジの提言など、日本の Global Health への貢献は続きます。この話は、また、次の機会にいたしましょう。